

# 小田原史談

第 141 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20

## 落城を目前に出された感状

### 悲運の城主 北条氏直

今度之忠信誠以古今難有候、意趣紙面不被述候、於達本意者、何之國候共可渡遺候、於氏直一代此厚志不可亡失候、時々刻々大細事共、異于他可懇切候、仍状如件、

天正十八年 庚寅

六月十七日 氏直 (花押)

(真秀)  
松田左馬助殿

(松田直弘氏所蔵文書)

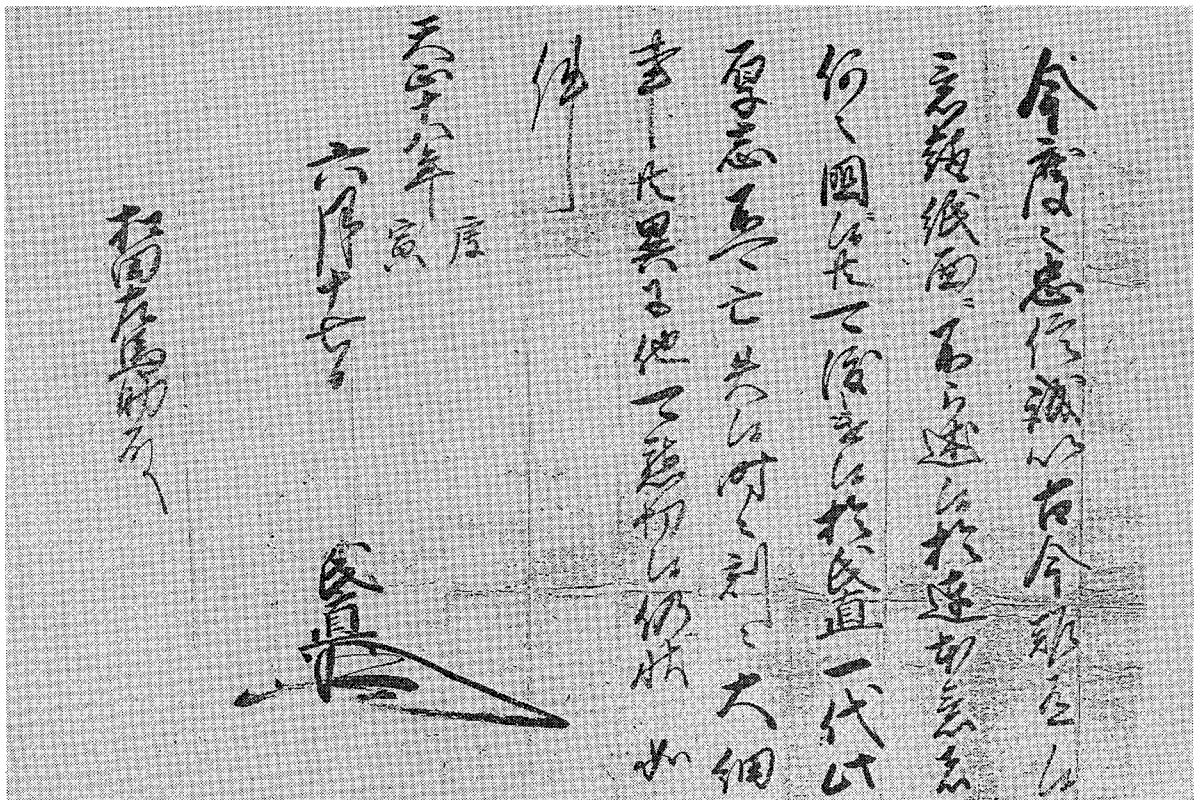
読み下し

今度の忠信誠以て古今に有難く候。意趣紙面に述べられず候。本意を達するに於いては、何れの国に候とも渡し遣わすべく候。氏直一代に於いてこの厚志亡失すべからず候。時々刻々大細事とも、他に異なり懇切すべく候。仍って状件の如し。

(『南足柄市史』より)

掲出の「判物」(はんもつ、又ははんもの、武将が書き判を書いて渡した文書のこと)は、故中野敬次郎先生がかつて蒐集された古文書のコピーで、中野先生が亡くなられる数カ月前、岡部忠夫氏が提示を受けたものである。しかし調べてみるとこの判物はすでに『南足柄市史』I資料編に掲載されていて、岩崎宗純氏の読み下しと解説が付されている。なおこの判物の原本は横浜市金沢区在住の松田直弘氏が蔵されていることも判った。

この判物、北条氏直の感状は天正十八年(一五〇)六月十七日、小田原落城の直前に家臣松田左馬助に与えられたものである。目下小田原市では小田原合戦四百年と銘打って多彩なイベントを展開しているが、四百年前の小田原落城の陰に咲いた秘話として、この感状のいきさつを明らかに



にしようと思う。

天正十八年、豊臣秀吉は九州の雄島津氏を下した勢いを駆って、関東を支配する北条氏政氏直親子を討滅して天下に号令せんと、二十余万の軍勢を率いて関東に向った。これに對して北条軍は関東の有力武將を小田原城に蒐め、籠城をもってこれに對した。氏政はおそらく小田原城の難攻不落の構えを固く信じて、秀吉軍を退けられると考えたのであろう。

しかしこれに對する秀吉は石垣山に一夜城を築き長期戦をもってこれに對した。北条軍は主力を本丸に置き、大窪口の出城には重臣松田尾張守憲秀を配した。そもそも重臣松田家は秦野地方の豪族秦野氏の分家で、松田地方を根拠地に勢力を張ったので松田氏を名乗った。南北朝の頃には河村氏と共に南朝側に属し「松田、河村党」として知られた。たまたま伊勢新九郎早雲が、小田原の大森氏を倒す折りには逸早く早雲軍に馳せ参じ、以来北条氏の重臣となったのである。

五代目の松田憲秀には男子三人女子一人あり、長男は新六郎政茂、次男は左馬助秀治(直秀)である。ところが次男の左馬助は氏政の近侍をつとめるうち氏政に深く寵愛され、ために長男の新六郎を廃して次男左馬助を松田家の嗣子とするよう父憲秀に内意を伝えた。憲秀は己むなく新六郎を小机城主笠原能登守康勝の養子とした。しかしその後、康勝に

実子照重が生まれたので彼に家督を継がせた。そこで新六郎は宙に浮いて笠原家の組子同心頭とはなったが、胸中忿懣やるかたないのは無理もなかった。このようなことから父憲秀も氏康在世の頃は重んぜられていたものの、氏康死後氏政の代になってからは何かと主君との間に緊密さを欠くようになっていたのである。

このようなことから新六郎は氏政に敵意を抱き、天正七年の武田勝頼攻めに當っては、氏政に叛いて武田軍に降伏した。しかし勝頼が信長によって滅亡してからは行く処もなく再び小田原へ戻ったが、父憲秀の嘆願によって一命は助かったものの、頭を丸めて父の領地河村あたりに潜んでいたのである。たまたま小田原攻防戦にあたって松田憲秀、左馬助父子が大窪口に布陣した時、新六郎は還俗していつの間にか憲秀の陣に加わっていたのである。

松田憲秀自身も氏康亡きあと氏政にうとんじられ、秀吉の小田原攻めに対しては強引な籠城作戦をとる主君氏政に不安を抱き、胸中深く決する処があったのかも知れない。そこへ新六郎が天下の形勢、秀吉軍の優勢を説いて父憲秀に謀反を勧めたのである。憲秀も五代に亘る北条家への恩義を忘れた訳ではないが、このたびの合戦は北条軍に利あらずと考え、早くより秀吉軍の堀秀政を通じて、ひそかに内心の意を伝えていたので此処に謀反の決意を固めたので

ある。

彼は長男新六郎、次男左馬助、三男弾三郎の三人をあつめ、内心の決心と手筈をはじめ明かした。新六郎はもとより賛成、弾三郎も父の意を諒としたが、左馬助は驚いて反論した。しかし父の固い決意には抗せず、父に従うことを約したものの、主君氏政に對する忠誠心をふり捨てることは何としても出来ず、一計を案じて大窪口を脱出する計をたてた。すなわち本丸に置いてある自分の常用の鎧を着用するとの口実で本丸より鎧櫃を取り寄せ、その鎧櫃の中に身をひそませて、夜中ひそかに近侍の手で本丸へ戻したのである。

本丸に至った左馬助は直ちに氏政親子に父憲秀の謀反を語った。氏政は翌六月十五日憲秀を本丸に呼び、謀反を難じて、直ちに投獄、新六郎を打首に処した。これによって松田

憲秀の謀反の計画は未然に防がれた。

この事によって氏直から左馬助に渡された感状が掲出の判物なのである。しかしこの翌月七月五日には小田原城もついに落城、城に入った秀吉は獄中の松田憲秀を引き出して、不忠の名目で切腹を命じ、氏政、弟氏照も自ら割腹して果てたのである。そして長かった戦国時代の全国騒乱もここに終結を告げたのである。

おもえば歴史の流れの一瞬に散った悲劇の証人である一枚の判物が、私たちに語りかけるそのいきさつのがらみを、わたしたちは如何に万感の想いで解きほぐしてゆくことであろうか。

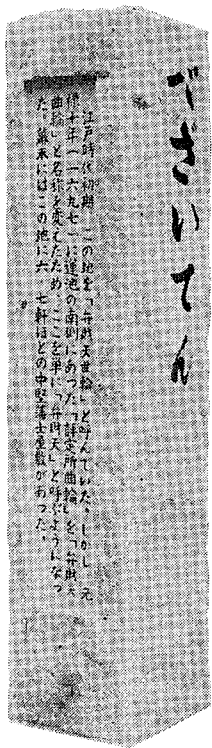
(高田喜久三)

小田原の旧町名保存碑

小田原市 歴史的町

名保存検討委員会(委員長山口貢氏)では、城下小田原宿で、江戸時代の慶応四年(但し明治元年は含まれない)まで使用されていた町名を、昭和六

十年十一月から平成元年三月までの三年五カ月をかけて調査研究。その結果を踏まえて、このほど各所に御影石系の標柱が建てられました。写真の「べざいてん」(弁財天)は小田原商工会議所近くに所在。



# 小田原叢談 (一)

## 石井富之助

### 小田原という名を冠した事物

大百科事典などを見てみると、小田原城とか小田原評定だとか、小田原という名を頭につけたことばが案外多く採録されているのに気がつく。事典をひけばだれにでもわかることでわざわざごひろうするまでもないことだが、一般にはこれに気がついていない人の方が多いと思うので、あえてこの抜書きを作ったわけである。

小田原菊小判 相模国小田原で鑄造した銀貨。面に菊紋の極印と壺両の字とあり。その種六。(一)は重量四匁三分。小田原北条氏は永楽錢一貫文に充つとあるが確かでない。(二)重量四匁。十六葉菊小判という。(三)重量四匁二分。(五)(六)重量未詳。「金銀図録」(大

い。)(大百科事典)

小田原鉢 小田原鉢というのは、明珍信家が相州小田原で作ったかぶとをいうのである。(古事類苑、兵事部)

小田原鐔 相州小田原の鐔師正次一派の作った鐔。(大辞典)

小田原正次 桃山時代の鐔工。初め小田原に住し小田原氏を称す。のち肥前唐津に移る。細透しに長。

小田原彫 彫木の器物に漆をもつて髹装した物の名称。木製の器物に牡丹、梅花、菱、紗綾形、雲形等を彫刻し、その上に黒漆を施し、更に赤漆をもつて裝飾した、いわゆる紅花緑葉風を模せるもので、小田原彫は一般に鎌倉彫よりは浅い。明応四年北条長氏、相模の小田原に拠つたため、小田原は関東の都会となり、諸工人ここに集まって、一種の様式ある器物を作つたので、その土地の名を冠したものである。(大百科事典)

小田原葺 こけら葺と同様のものである。(大百科事典)

小田原提燈 箱提燈の形状

細く筒状をなせるもので、必要に応じて伸縮自在となし得、畳んで懐中することが出来る。延宝頃の附合の句集「隠蓑」に「おもひの煙ふところ提燈」とよまれたものはこの提燈の進化したものである。もと相州小田原駅の人甚左衛門という者天文の頃はじめて造るに

より名づくといわれる。(大百科事典)

小田原足駄 相模小田原産の一種の足駄。東海道名所記「寛文」小田原足駄・櫻の丸木履なり」(大辞典) 小田原様 昔、小田原北条家の臣下達の間に行なわれた特有の風俗。北条五代記「上下の嬖の矯めよう、衣紋のかきように至るまでも、小田原様とて、皆人学べり」(大辞典) まだこのほかに大百科事典には小田原、小田原城、

小田原征伐、小田原報徳仕法などの項目があり、また別の本には小田原水道あるいは小田原用水ということばも出てくるが、それらの説明はここではおいた。

ともかく、こういうふう

に小田原という名を冠したことばが、現代の事典にくつも見出だせるのは、むかしの小田原がありふれた都市ではなかったということの証拠とってよいであらう。

大百科事典に出てくる小田原関係の項目はこれだけではなく、頭に浮かんでくるままに、北条早雲をひけばその記事が出てくるし、大久保忠真も出てくる。酒匂川も早川もあるし、その他いろいろの事がらひけるのである。

そんなふうにして「つれづれなるままにひねもす大百科事典をひく」というのもちよつとした暇つぶしになるのではないか。

### 小田原相談

小田原には「小田原評定」というあまりかんばしからぬことばが残っている。「小田原評定」という本には『世諺叢談』という本は

天保田榮著  
小田原相談  
完

大行寺聞見のいうところによると、北条氏は小田原において評定所を設け政令を協議した。朝から夜まで評定所に集合して議論がなかなかきまらず、ついに滅亡してしまつた。これから、おおせいの人が集まって評議をし、久しく決しないのを小田原評定というふうになつた。

また『松屋筆記』には北条氏直は愚将であつて決断力がなく、群臣に評議させたが、ただ座談のみに終り、実地に行くことができず、ついに滅亡した。世にこれをとつてまともでない評議のことを小田

原評定といつた。

江戸時代に出た本のうちには徳川氏に対してはお追従をいい、そのため敵にまわつた方をことさらに悪く書いてある例が多い。これなどもその例であるが、四百年も経つた現在もまだ通用していい笑い物にする者がいるかと思つと、それをまたひどく気にする人もある。ばかの鉢合わせみたいなものでどっちもどちといわざるを得ない。ただこ

『小田原相談』という本のことである。明治二十二年に町村制が施行されて小田原町が誕生したことはだれでも知つてゐるのだが、その前年の明治二十一年八月十一日に久保田栄著『小田原相談』という小冊子がでてゐることはあまり知られてゐない。その冒頭にこんなことが書いてある。

(前略) 明治二十二年はいよいよ町村制度実施の運びとなつた。その筋でもすでに町村制度取調委員を設けて、それぞれその研究に着手したと聞いている。この時にあたり、われわれ町村の住民たる者もまた、その町村制度

の中にある町村会というものを真に町村に利益のある議会にしよつと望むならば、今からよろしくその研究会、すなわち下稽古をしておかなければならぬ。これは今日町村制度を重んじる住民の義務であらう。そこで何はともあれ、さっそくその下稽古をしようとする有志者と相談して一の議会を起し、これを小田原相談会と名づけ、まずわが小田原住民の公益をはかるため、ここに假りに左のような評議をしたものとして、その経過をしるす。

これに続いて、議長の選出、町村制度の説明、議案の審議決などの経緯を克明に描写してゐる。そして、議案としては

- 第一号議案 農民奨励策
- 第二号議案 住民の勤勞
- 第三号議案 婦女子の教育
- 第三号議案 住民本心の改良

の四つが挙げられてゐる。頭からしつぱまで、小田原相談会というのまでも著者の創作で、まことにおもしろく、珍書といつてよい本である。

そしてこの中にも「小田原評定」がでてくるのである。この相談会を小田原相談会と名づけた以上は、世間の人々がかならずこの相談会を例の小田原相談もしくは小田原評定と考え、俗にいう遷延、不決、破談、変約の会議であらうと、

ただちに悪評を下すかも知れません。(中略) 小田原相談というのはまさしく遷延、不決、破談、変約の異名に違いないが、まったく小田原地方から起つたことばではなく、上杉家の評定といい、秀吉の変約といい、みんな都合極まるこのようなことわざは先方からで

明治二十一年八月九日印刷  
 明治二十一年八月十一日出版

著者 神奈川縣士族 久保田 栄  
 發行者 神奈川縣相模郡足柄下郡小田原 萬年町丁目五百五十九番地 鈴木 英 雄  
 東京府芝罘 森 田 豊  
 東京府芝罘助町十一番地寄留 石 齋 堂 書店  
 神奈川縣相模郡足柄下郡小田原 緑町一丁目七十九番地

印刷者 寶 樹 店

印刷所 東京府芝罘助町十一番地寄留

きたことばで、わが小田原方にはもとよりむかしから物事にグズグズしたためしはありません。来春から開かれる町村会の席上にはどうか一同がこの小田原相談などという悪いことわざはかつぎ出さないように注意してほしい。

著者久保田栄がどういふ人か知らないが、発行者は鈴木英雄となっている。鈴木

木十郎氏にこの本を見せたら、

「おかしいね、兄はこの年にはまだ十四だったのだよ。」といった。

ほんとはこの本などは全文紹介したいくらいのもんだがそうもいかない。読みたい人は図書館へ行けばあるとだけ書いておこう。

### 小田原叢談について

石井富之助

「小田原叢談」はわたしが

図書館在職当時、小田原について見たり、聞いたりしたこと、あるいは資料の中から発見したことなどを書きとめておいたもので、その一部は神静民報に発表したこともあるし、また昭和五十九年から約二年間、「広報おだわら」に連載したこともあるが、もう大分歳月が経って忘れてられている向もある

ので、ここにあらためてその全部を「小田原史談」に掲載することとした。いくらかでもお役に立てば幸いである。「小田

原叢談」の名は『小田原相談』をもじったものである。

### 『小田原相談』について

編者

『小田原相談』の表紙と奥付を掲げることが出来たのは、先般、酒匂の川瀬速雄氏がそのコピーをお送り下さられたためです。まず、改めてお礼を申しあげます。

川瀬氏は、神田の古本屋で書名に小田原とあるのにひかれて、求めたそうですが、明治

## 大正・昭和と

### 著名な文人と交遊のあつた

#### 小田原御幸浜・養生館主

#### 西村隆一氏に聞く(四)

#### 北原白秋のこと

「震災でみんな家は潰れちゃったでしょ。それで、私が先頭に立ちまして、法政大学と交渉したんですよ。震災地の子弟は、全部授業料を免除してくれと。」

ところが、どうしても、大学側は言うことを聞いてくれない。それでねえ、どうしても

聞いてくれなきゃ困る、と言うと、生徒監の爲光と野上の両先生が折れましてね、半額にしようといったのです。」(以上前号より)

「野上先生の名は東一郎といって野上弥生子の夫でした。」

「しかし、半額どころじゃあどうしようもない。みんな悲惨なもんだ。それだから

ら授業料を全部免除してくれと強硬に言い張ったんです。それで話が決裂、私は退学して……。交渉がまとまらなかったのが退学の一つの原因で、それと小田原の家が潰れちゃったですからね。

ところで、

北原白秋さんは、よく私のところに来たんですよ。その後白秋さんは、十字町のお花畑(南町三丁目五番三三)号II会報(三十九号)で地番を三三号としましたが、誤につき訂正いたします)から天神山に引越していきましたが、菊子さんが、白秋さんと一緒にいるとき、菊子さんは、わたしとここで支度

をしてそれで、みみづくの家へお嫁に行った訳です」

白秋が天神山の傳摩寺の庫裏の別棟に移ったのは、大正七年(一九一八)十月のこと、『赤い鳥』を主宰した鈴木三重吉らの援助で、寺の東側に萱屋根と藁壁の木鬼の家と、方丈風の書齋を竹林の中に建てた。そして、物心ともようやく恵まれるようになると、洋風の山荘を新築する運びとなった。

千葉菊子が白秋と結婚したのは、翌十年四月二十日のこと、式は新築間もない山荘で挙げられた。白秋は、生涯二度結婚生

期の小田原人の情熱がこめられているし、当時の小田原の状況を知る一つの資料として面白さがあるからと、提供して下さったのですが、この書は、B6判程度の大きさで、六十一ページに及ぶもので、何分、会報の紙面の関係から一度に全部を掲載することが困難なため、いずれ機会を得たいと思っております。

なお、明治二十一年九月二十日の『横浜毎日新聞』には、

◎ 小田原相談 は久保田栄氏が小田原相談会と云へる一会を想像上に作り出し其の議員討議の語を仮りて或は市町村制の精神を説き明かし或は小田原将来の計画を述べ立てたる面白き一書にして売捌店は同地の石寿堂書店なり

と報じられています。奥付の住所が神奈川県相模国足柄下郡小田原とあるのも面白く、士族とか平民とあるのも時代が感じられます。売捌店の石寿堂書店は、現在の石寿堂スポーツ(本会の特別賛助会員)です。印刷所が東京であるのも、当時、小田原ではまだ印刷出来なかったのではないかと思われま

す。定価は十二銭です。

活に破れており、菊子との結婚をしたのは三度目で、縁談は、西村さんの親戚に当る、劇作家で美術評論家の、当時小田原に在住した河野桐谷の夫人喜久子の手によって進められた。菊子は喜久子と同じく、大分市出身で、幼稚園・小学校と同級の幼馴染であった。

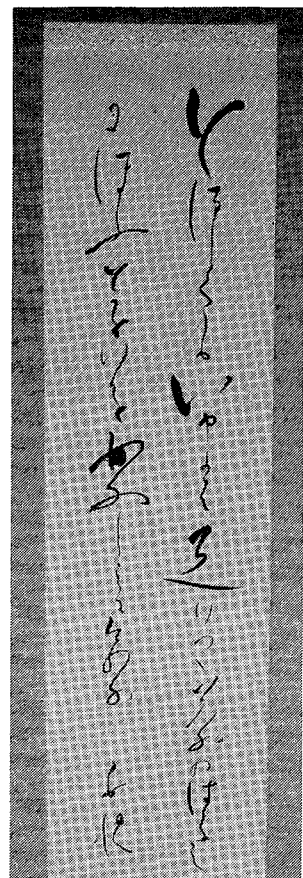
「それでねえ、旅館は母親が経営してたんですが、たまたま、いろんな事をやっていた関係で、ある女性を知った訳ですね。そのことを おふくろに話をすると、私の叔父が嫁さん話を持ち込んで……。横浜かなんかのフェリス女学校を出たい人がいるから貰えと勧めの訳です。しかし、そんなこと知ったこっちゃないよ、と私は言ったんです。実は、青木さんの娘さんを貰おうと、下心でいたのを、お袋に反対をくっちゃったんです。それで困っちゃいましたねえ、北原白秋さんに頼み込んでんです。なんとか助けてくれないか、と。すると、へっちゃあ、仲人になってやろう」と、白秋さんと菊子の快諾を得て、媒酌人

になって下さって、やっと家内が持てたんです。その家内も早死にしまして三十五歳で亡くなっちゃって……。そういう訳で北原さんも非常に残念がって歌をくれましたけどね。

——そんな関係で、しよっちゅうわたしとこへね、北原さんは来ましたね。仕事に疲れるとやって来るんです。

来ると、私にへちよっと一緒に行かないかと言われて……。どこに行くのと尋ねると、へす、この先だよ。と行くんですね。そんなこと皆さんよく知らないことぢやあないですか……。この先に松月という旅館がありました。石で囲った家がありますね、今は材木屋になっていますが(本町三丁目十三番三号)、その隣りに小さな料理屋がありまして、北原さんは、私をそこに連れて行くんです。

この店の名は失念してしまっています、松月の方は大きな家だから分かってるんですが——。ところが、館長(図書館?)さんが調べてくれました、伊香保という名前だったことが分かり



とほしくも いまは足りつつ茶の花の  
にほふ となりを樂しみにけり 白秋

西村隆一氏蔵

まして——この店の看板を、北原さんは、女将に頼まれて書いてますが、やはり震災で焼けたんでしょう。

——この店に来ると、北原さんは、へおい、お前、ちよっと隣の部屋で待ってなよ」と言うので、私は隣の部屋でひっくり返って待っている訳です。

北原さんは、芸者を一人呼んでね、三味線をひかしたり、話をしたりして、すると小一時間もして、襦をひよっと開けて、へおい、俺が悪者に見えないか?と、気懸りになるとみえて、そういうことを言われたことがありますよ。仕事に疲れて気分転換に来るのでしょから、へいや、そんなことないよ、ちっともそんなこと感じないよ」というと

この歌は震災のあった大正十二年秋に詠まれたもので、その詞がきに「震災以来広大なる隣の別荘への出入自在なれば 行きて遊ぶも心のままなり 素にして悠たるかな この秋や」とある。生前は『小田原歌抄』、没後は『風隠集』として収録。

へああ そうかいぢやあ」といって、一緒に帰って、北原さんは、天神山に戻る訳です。天神山では菊子さんは、承知していたか、どうか、わたしんちところまで来るので安心されていたのではないかと思います。北原さんの、ほんの僅かの時間の息ぬきといえますか——。そんな訳で、北原さんとは、よく往き来しました。

大正十二年、あすこ(みづぶくの家)が潰れたときにね、へどうだこの建物を一切持って行かないか」と

言われたんです。ところが大地震で、それどころではないでしょう。方々の家が潰れたり、焼けたりで……。この家(養生館)も潰れたんです。貰いたいが、運ぶっても大変だから、残っている雑誌とか、机など貰いました。机は郷土文化館にやっておりますが……。それからいろいろなものもくれましたが、私も整理しきれないから一部だけ貰って……。今から考えると惜しいですね。」(続)

(岡部忠夫)



# 小田原の浮世絵 (一)

岩崎宗純

## (1) 北斎の小田原作品

浮世絵は江戸時代庶民が生み出した民衆芸術として、今日世界的な評価を受けています。ジャンルも美人画・役者絵・風景画等さまざまであり、また表現様式においても初期の墨摺・丹絵・紅摺絵・錦絵など多様さを誇っています。

これらの浮世絵が現在世界中に何点残っているか定かではありませんが、私の想像では一五〇万点は超えると思います。

ですからこのような膨大な

な点数のなかで、小田原を描いた作品が何点残っているかを探することは大変困難です。小田原浮世絵目録が完成するのは遠い将来のことでしょう。

現在小田原浮世絵を一番多く持っているのは、丹波コレクシオンを所蔵している神奈川県立博物館ですが、その目録によると小田原の浮世絵は三二点です。そのほか丹波コレクシオンにはないが、私が所蔵しています浮世絵が六点左右あり、それを加えますと三三八点ほどが知られていることになりま

す。

小田原の浮世絵を一番描いているのはやはり、旅の絵師・風景版画の第一人者安藤広重です。あの有名な『東海道五拾三次之内小田原』（保永堂）をはじめ十四点ほどあり、弟子の二代、三代広重を含むと小田原の浮世絵の半分は広重作品で占められています。ついで多いのが北斎・国芳・三代豊国と続きます。そのほか豊広・国盛・芳幾・芳虎などの浮世絵師も小田原を浮世絵に描いています。

これら浮世絵の中で一番多く画題として選ばれているのは「酒匂川かち渡し」の様子を描いたものです。前方に箱根山を望む酒匂川の風景は、人々の旅心・浮世絵師の絵心を誘ったのでしよう。東海道の続絵は、北斎も描いています。一般には浮世絵の東海道ものというと、広重作品を想い浮かべますが、実は浮世絵の東海道ものの開拓者は北斎で、北斎は広重が保永堂版をはじめとする東海道ものを発表する三十年前に一連の東海道ものを刊行しています。北斎の小田原作品はつぎの五点です。

### 一、小田原

画狂人北斎画  
箱根へ四里八丁

東海道・四つ切  
享保四年（一八〇）  
の作品です。小田原の外郎売りを描いたもので背後に小田原城が描かれています。

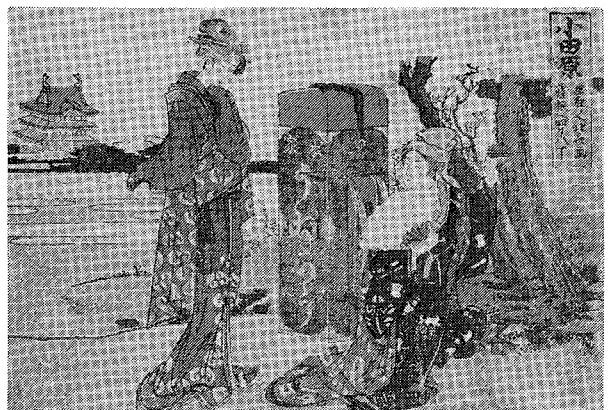
二、『小田原』東海道五十三次絵  
尽・小判  
文化七年（一八〇）  
の作品です。小田原宿でくつろぐ旅人の姿が描かれています。鶴屋金助版。

三、『おだわら』東海道五十三次絵  
尽・小判  
文化十年（一八三）の作品で、小田原城を背景に外郎売りが見え切っているところ

四、『小田原』東海道五十三次・四つ切  
同じく文化十年の作品で、城を背景に外郎売りが見え切っているところが描かれています。三の作品とほとんど同一構図ですが、城の位置が三が右側・四が左側という違いがあります。なおこの二

以上五点の北斎作品は、北斎の作品としては中期に属するもので、色彩的な華麗さはありませんが、構図の巧みさはさすがで小田原にとっても記憶すべき作品群だと思えます。

### 北斎画 享和四年 四つ切



作品に描かれた外郎売りは五代団十郎を似せたと  
いわれています。

五、『小田原』東海道五十三次・四つ切  
文化年間の作品で、これから箱根山越えをするのでしようが、茶店で休む旅人の姿を描いています。

永寿堂版。

以上五点の北斎作品は、北斎の作品としては中期に属するもので、色彩的な華麗さはありませんが、構図の巧みさはさすがで小田原にとっても記憶すべき作品群だと思えます。



北斎画 文化10年 小版判

## 久野・東泉院に ヒューマニティーにみちた

### 間中喜雄氏の「平和の碑」

〔住職岸達志師の挨拶〕

……間中先生は、かねがね「平和の碑」を建てたいとおっしゃっておられました。先生は、私が申す迄もなく、小田原の間中病院の理事長をしておられます。名医であるとともに、大変学識も高く、また、多能な方でございます。詩も、小説も、随筆も、書道も、彫刻も、絵画も、ゆくとところ皆一芸に秀でておられる方でございます。中国には「六芸に秀でる」という言葉があります。私などは一芸にも達しません、間中

先生は六芸に抜きん出ておられます。

政治的な戦争であったベトナム戦争で、何がなんだか分からないうちに、大勢の人が、アメリカ人もベトナム人も中国人も亡くなっております。それで、先生は、そうした理由もなく殺されてしまった、ベトナムの年寄りのレリーフを自らお作りになり、戦争の痛ましいことを、ご自分でお作りになった詩を刻んだ記念碑を建てたい、とおっしゃられました。それが出来る時分に、もう一つ原爆の恐ろしさをうたった碑も

久野・東泉院境内の一隅に間中喜雄氏が作られた「平和の碑」が建っている。開碑式が行われたのは、昨年の十月二十六日。間中さん(敬愛をこめて「さん」づけで)が亡くなられた一カ月足らず前のことである。

この日、間中さんは、すでに体力を消耗され、歩行も困難な状態であるのに拘らず、東泉院に足を運ばれ、最後の力を振り絞って、開碑の挨拶をされている。普通では出来ぬことである。医師であるため病状からして自分の死期を悟っていたに違いない。常人ならば自分の亡きあとのことを考え、肉親係累のことだけで頭が一杯の筈だ。

ところが、戦争のため何がなんだから分らない理由で死んで行った人の冥福を祈るため、「平和の碑」を建てるといふ願いは、その心情にヒューマニティーが満ち満ちていて始めて可能なことだ。医師としてその職務上、冷静に多くの人の臨終に立ち会った自分が、間もなく生涯を閉じるに当って、為さなくてはならない義務感というよりは、本来的に備えておられた人間の暖かみが、「平和の碑」を建立されたのであろう。またそれは、死に臨んでの男の美字であるかも知れない。

この美しくも立派な人生の幕切れを飾った間中さんを偲びたい。また、不世出ともいふべき小田原が生んだ間中さんが残された数多くの業績を讃えたい。幸いにも、「平和の碑」開碑式当日のことが録音されているので、その一部をお伝えしたい。(編者)

建てたいとおっしゃるもので、共に建つことになりまして。本日は、日もうららかにご縁のある方に大勢来て頂きまして、ほんとうに有難うございました。

間中先生は、最近健康を害しておられまして、外出もままならないようですが、ご自分がお作りになった、記念作品を建てられるため、無理を推して、おいでになった訳でございます。

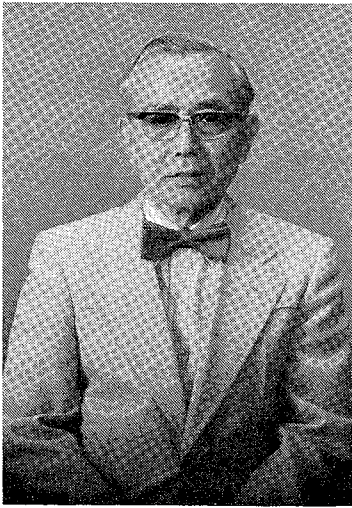
戦争反対とか、あるいは原爆反対とかいいますと、とかく政治的な意味で、そういう事を叫んでいる人が多いのですが、間中先生はご自分が科学者であり、全くの自由人でありまして。そういう政治的な意味から、戦争反対、原爆反対をおっしゃっているのではなくて、全人類の意味から、ほんとの科学者としてその恐ろしさを知っておられ、自由人としての平和の願いから、ご自分の作品を碑とされた訳であります。

平和が良いということとは分かっております。しかし、そんな分り切ったことを人間は、何万年も叫び続けながら戦争したり争ったりしてきている訳でございます。

間中先生は、東洋医学のご研究家としても世界的に有名な方でございます。私は、小田原の生んだ、医学者としても文化人としても、第一級の方であると思っておりますが……。

だいいち、西洋医学と東

#### ありし日の間中喜雄氏







間中喜雄氏の「平和の碑」

洋医学というのは、世界観が大変違うのです。西洋医学というのは、病気があって、という前提の下に立って、病気を克服し撲滅しようというのが、その考え方です。東洋医学というものは、病気そのものは元来ない。健康がその人の本態であって、病気は健康が損なわれている状態であるというのが、その世界観

であります。近頃は間中先生の啓蒙により東洋医学は時代遅れでも、迷信的な医学でもなく、西洋医学と相並んで採長補短すべき傑れた医学であることが認められてまいりました。しかし視点の違う二つの医学を理解するということはたいへん困難なことであります。

註 東洋医学は未文化的要素、経験的要素、陰陽五行

的要素、等々が批判されがちである。しかし西洋医学の発達が中世的迷信的要素等からの脱却にあったことを知れば、要は非難の問題でなく価値の認識の問題であると思う。

間中先生は、西洋医学の中で最も強味の外科の専攻でありながら、全く違う世界観を持っている東洋医学を研究されて、その方面でも、世界的な権威者になっておられる、ということには私は、先生の洞察と見識が天才的に卓抜したものである、というふうにも思っておる訳であります。

先生は今年八十歳近くになったと思われませんが、小田原では九十歳を過ぎても活躍されている方がおられます。まだまだ、これから十年以上も、われわれ小田原の誇りとして、ご活躍下さることを願っております。

先生は最近健康を害され、大変、私は心配しております。

間中先生、どうか、益々御自愛されて末永く、私どもの爲に、深い造詣をもった御指導をお願い致しますと思っております。

それでここに、先生が作

られました詩を皆さんと一緒に読んで終りにしたいと思います。

何のために  
死んだのか  
判らない人  
たちのため  
に捧ぐる碑

戦争の  
狂気が

国々を

侵すとき

無辜の

人々が

いたましくも

その犠牲に

なつて

殺されてゆく

〔間中先生挨拶〕

今日はかくも多数の方に  
ご参拝を頂いて大変有難う  
ございます。今日のこれは  
お葬式だと私は思っている  
んですけど、大変に変わった  
お葬式を出して頂いて……。  
施主を引受けさせて頂きま  
して……有難うございま  
した。

先程、和尚さんがいろいろ  
ご紹介下さいましたが……。

和尚さんが私を買い被っ  
ていられますので、敬意を表  
して下さいますのは結構で  
ございますが……。

……私、今年七十九歳に  
なります。満で七十八歳で  
すが、今迄、丈夫だ丈夫だ  
と思っておりましたらば、  
この夏、病気をいたしました  
で……。まあ、世間には悲  
しいということになってお  
りますが、どうせ私のやり  
ます恋煩いは、下肥えのコ  
ヒの方でございます。

それで、はたと気がつき  
ましたのは、わたしゃ、も  
う何時死んでもいい年頃で  
すから、構わないですけど、  
その前に私は、日頃気にし  
ていた、あの何の爲に死ん  
だか分からない方のお葬式  
をしてやらなきやあ悪いん  
じゃないかという気がいた  
しまして、今回のようなこ  
とを始めた訳でございます。

ええ、かくも多数皆様に  
ご参拝いただけて幸せで  
ございます。

……ええ、丁度、第一次  
大戦が終わった頃から大量殺  
人が行なわれました……。  
例えば、スターリンが二千  
万人ぐらい殺したんじゃないか  
いかとか、ヒトラーは何  
千万人殺したんじゃないか

とか……。それから、中国でも毛沢東が少し著録しまして文化大革命を起こし、随分沢山の犠牲者が出ているようございまして、あっちで何千人、こっちで何万人と、まあ大変な殺人が……。

この方々は何も申しません。この人たちは、仏教徒とは限りませんし、キリスト教徒である人もいますけど、交通事故で五十人死んでも合同慰霊祭をやっているのに、誰も拜んでくれない、拜み出してくれないという無縁仏が沢山いるとしたら大変残念でございまして……。まあ、私自身がちょっと怪しくなっているのにとんでもないことございまして、

そのような事でその人達のためにお葬式をささやかながら営みたいというのが私の心持でございまして。皆さんにこのように沢山来て頂いて大変光栄と思えます。命が惜しくない人はいませんけど、何時どういいう弾みでやられるか分からない大変な世の中になりました。そのうち、地球全体が怪しくなってしまうのではないかとこの声もあります。

いまブラジルは、どんな沢山の人が入ってきてジャングルを焼いてしまつて、そこを牧場としてやってゆく。地球の酸素の半分以上をブラジルでこしらえているといふ事ですが、それが怪しくなつてきて……。

ところで、私は、そろそろ自分の葬式をささなければいけないという時期に、とんでもないおせっかいの事でございますが、何のために死んだか分からない仏様にささやかながら回向をして差し上げたいと思つた次第でございます。

### 稲葉博君のこと

#### 隠岐 威重

「稲葉が死んだ。知っているか？」

れでは失礼」始めの勢いは消えて、淋しそうに立ち去りかけた。

〇がすごい勢いで老人宅に飛び込んで来た。「……稲葉君のこと(死)、俺は知っていたよ。嫁の関係で(息子達は稲葉の紹介で結婚した)知らせがあった。でも俺は葬儀には行かなかった。息子達を代わりにやった」

「まあ、いいじゃないか、あがれよ」と無理にさそいこんだ。そして、酒になった。

「……俺は城内(高校)からよそに移つて、そこを退職してから大分たつたから知らせがなかったのか。そおか、君は知っていたのか、そ

まだ若かった頃(昭和二十年代)の生活、三人(稲葉・〇・老人)の交友の様を語りあった。稲葉の担当は社会学で歴史が専門、〇も社会学だが経済会計学が特技、老人は理数系。専門は夫々違つたが三人はうまく合った。〇は中国東北からの帰還兵

「……俺は城内(高校)からよそに移つて、そこを退職してから大分たつたから知らせがなかったのか。そおか、君は知っていたのか、そ

昭和二十八年の学制改革(新制中学・高校の設立)で、八幡山の小田中から、新設の高校に行かずに大勢の生徒が夜間部の定時制に下つてきた。敗戦直後の家庭の貧困・混乱の様を示していた。正規の学校、昼間部に行けず、

老人も大陸(滿鉄)からの引揚げ者。稲葉は大学新卒で来た。彼は老人達より十歳くらい若かつた。が、妙に老成した姿を好み、老人達のを追つた。その背伸びした様も次第に板について来た。

働きながら学ぶ夜間部それが弾みになり、ハングリー精神をかきたて、かえつて学問に対して真摯の姿を求めていった。屋の会社のと、横浜の大学に学んだ者。高卒後に新たに得た職場で推されて大学に、大学院に学んだ者。家業の農業をこなし、バイトに正月用の飾り物を作り神社の境内に並べて売り、そんなことで得た金で農系の大

した顔に白い歯を見せて笑つていた者。あとの二人は大学教授に、前の者はフィルム会社の主任研究員になった。右腕が少し不自由な女学生も、男生徒の熱気が移り、奮起して大学に進み、永年の願ひの高校教師の職を得ていった。また、まだ、フィルム会社の管理職、工場を五つも持つ社長さん、等々と多数の努力者がいた。また、教員室では、新制の東北大学の教授の職を捨て、郷里にもどり帰農したA氏。海軍機

関学校の英語の教授で中将待遇のH老。H老は一時横須賀にあった機関学校に職を得ていた芥川龍之介の噂をかすかに老人達に伝えてくれた。民間、会社の高級エンジニア、管理職、英会話が上手な交通公社出の英文学のS等々が、雑然と職員室を占め、社会に、歴史に、文芸に鋭い批評の眼を、皮肉な論旨を交え、投げあっていた。

それにくらべると、屋間部の職員は素直な子供臭が抜けぬ集団、夜間部のそれは、やゝうらぶれ、くたびれた大人の群だった。

交通公社でSの同僚、芥川賞を受賞したての八木義徳氏を囲んで文学を論じ、また、すきっ腹の飢えをもとめせず、朝九時の屋間部の授業から、定時制の終わる夜九時まで、駄弁・奇弁を飛ばしては楽しんでた。

稲葉の席は屋間部にあったが、背伸びの体質か、うらぶれた大

人の部屋に引かれたのだろう、殆ど入り浸りだった。その談論風発の中、Oは近郷に住む文人学者、有名人訪問を思いつき、仲間を誘発、狩り立てていった。

その犠牲者の第一号が、伊東に住んでいた尾崎士郎であった。平屋の古い小さな家の八畳間に、塗りの少しはげた大机、その上に白い原稿用紙が輝っていた。

初夏の頃だったか、単衣の和服の胸をあげだらしくまとい、胡坐をかき、股間に茶色の猿股をのぞかしていた。つるの折れた眼鏡、その折れたつるを紐でつなぎ、大口をあけて笑うと前歯が一本折れ、ヤニだらけの口腔が無頼の様を飾っていた。誠に無頓着、人生劇場の登場人物が座っているようだった。

つい最近、真鶴の中川一政の美術館を訪れ、そこに一政描くところの人生劇場の挿絵の原画



ありし日の稲葉博君

をみた。そして、一昔まえの伊東行、訪れた頃の士郎の姿を、その挿絵の中に見出し、楽しく回想した。

士郎氏は、戦争中の執筆で戦争に協力したというかどにより、GHQの指令で、まだ、執筆を禁止されていたか、それとも、執筆禁止が解除されたばかりだったか、その点記憶がはっきりしないが、ともかく無遠慮な田舎教師の訪問を、長時間いやな顔

もせず応対してくれた士郎氏の好意には深く感じ入った。その伊東訪問に力を得てか、今度は下曾我の尾崎一雄氏を訪れた。

小田中で一年先輩、友人の絵描きのSが一雄氏の妹さんと結婚していた。その妹さんもS氏も城内高で一緒の職場結婚。一雄氏の末娘(英子さん?)も当時在学中。老人は彼女に数学を教えていた。そんな関係で、何

だか内輪の感じがして、相当無遠慮にふるまったと記憶がある。当時文壇では明暮熱が上がり、名人戦等の観戦記を文士が特命で記したり、文壇内でもリーグ

式の碁戦を楽しみ、その戦いで一雄氏が優勝、立派な碁盤を贈られていた。それを我々に自慢して見せた。

碁をやるOは、ではと挑戦、学校の薄汚い宿舎筆じこみの荒っぽい碁である。ところがその喧

嘩碁で文壇一の打ち手をねじ伏せてしまった。それですっかり一雄氏の機嫌を損ねてしまった。老人は早稲田のおんぼろ本屋の大観堂(一雄氏が下積み時代世話になった本屋)の話を、志賀直哉と奈良での交渉の様を出し機嫌をとったが、遂に帰るまで不機嫌そうな顔をしていた。

文学にはあまり興味を持たなかったか、稲葉は両尾崎宅訪問には参加しなかったと思った。京大の美学を出たK君あたりが尻馬に乗ったのではなからうか。だがのちに稲葉宅を弔問に訪れた時、妻女の言によると、なぜ俺はあの時、両尾崎氏宅と一緒に訪れなかったかと残念がっていたと聞き、彼もやはり行き

たかったのか、文学にも少しは興味があったのかと今までの考えを訂正した。

その後、天神山の深沢正策氏宅を訪れた。たしか二、三回は深沢氏を尋ねたと思う。

この時は稲葉も一緒だった。天神山の急な坂を登ると右に折れて一番はじめの家が同氏邸だ。その頃はまだ現在のコンクリート建ての館でなく、和風だった。玄關脇に中国風な大きな鑪が下がっていた。

当時昭和二十年頃A・トエンビーの史観がもてはやされた。だが当時、臘山政道の

抄訳本が巷に一つあるだけの頃だった。何処から聞きかじったか稲葉はトエンビーの信者になり盛んに彼の名を口にしていた。お先物かつぎか。吾々の間では稲葉の渾名をトエンビーと冠した。偉大な英国の史学者の名を渾名にするのだから悪くはあるまいと思っていた。その命名者は老人だとOは云うが、どうも定かでない。

深沢氏について老人は深く知らない。ただ二、三回の訪問で、戦前は南洋開発公社(?)に勤務、南太平洋に散らばる群島の開発、リン鉱石、砂糖、ヤシ油等でも取扱ったのか。

博覧強記、理系、文系の両刀使だった。浅学非才の田舎教師の手に負える御人ではなかった。でも、深沢氏が電力の鬼と称された松永安左衛門をパトロン

にどおしていただいたかは不明だ。電力之鬼氏が深沢氏の学才を認め、その生活を保証し、安んじてトエンビー史観の膨大な

全書の全訳を託したと思っただ方が妥当だろう。ただ気にかかることは深沢氏が全訳を完成した時、それを報ずる新聞紙上に記者は松永安左衛門とだけ記されていたことだ。

世間はまさか松永氏がこの大労作を自身でなしたとは思っていません。本の扉の裏には松永・深沢共訳と印されているに違

ないと思うが、貧しく、ものぐさな老人はその完成した全集を手にしておらず、自身の眼で確かめず、また確かめようとしもない不精を深く詫びるしかない。

二、三回の深沢氏訪問の結果、稲葉は深沢氏の毒氣にあてられたか、その学識に脱帽したか、その後はあまりトエンビーを語らなくなった。

今年春が早かった。冬が暖かかったといった方がよいかも知れぬ。桜が全国的に一週間早いとも報じていた。

稲葉の四十九日前に霊前を訪れることを約したOと共に伊東市宇佐美の彼の宅を訪れた。散り遅れた桜がまだしっかりと木に留まり、うす桃色の幕が半島の山々の間を飾っていた。予報は雨と報じていたが雲の間から陽がさしていた。

三十年ぐらい前になるが、一回この宇佐美の家を訪れたことがあった。O・国語教師のK・それに体操のIの四、五人の群だった。何でもここまで来たか忘れてしまっていたが、あとで夫人との話の中で、新婚の二人の家庭を襲ったことが分かった。稲葉の結婚は少し遅れていた。

略 歴

昭和2年3月17日 東京市芝区に生れる  
昭和20年3月 東京府立第六中学校卒業  
昭和22年4月 新潟高等学校(旧制)卒業  
昭和25年3月 東京大学史学科卒業  
同 4月 神奈川県立小田原城内高等学校に就職  
昭和62年3月 同校を定年退職  
同 4月~63年3月 同校特別講師  
昭和63年4月~平成2年2月 同校非常勤講師  
この間 神奈川県高等学校社会科歴史部会長・  
全国歴史教育会副会長・小田原市文化財  
保護委員等を歴任。  
平成2年2月24日没 享年62歳

著 書

『神奈川県歴史散歩』(共著) 昭和51・6 山川出版社  
『神奈川の歴史百話』(共著) 昭和55・7 山川出版社  
『かながわの100人』(編著)(かもめ文庫)  
昭和56・3 神奈川県民部文化室 神奈川合同出版  
『郷土誌辞典 神奈川県』 昌平社  
『榎の木蔭 小田原高女・城内高校ものがたり』  
昭和58・3 榎の木蔭刊行会  
『博学紀行 神奈川県』(共著・編集指導)  
昭和59・2 福武書店  
『かながわの寺と社—その成立と縁起』(かもめ文庫)  
昭和59・3 神奈川県民部文化室 神奈川合同出版  
『関東古社名刹の旅』千葉・埼玉・神奈川編  
昭和61・9 読売新聞社  
『関東古社名刹の旅』群馬・栃木・茨木編  
昭和62・2 読売新聞社  
『東京古社名刹の旅』 昭和62・8 読売新聞社  
『神奈川の古寺社寺縁起』 昭和63・4 暁書印館  
雑誌『かながわ風土記』に連載の「関東古社名刹の  
魅力⑨深大寺開創の謎(下)」(平成2年2月)が  
最後の発表

日頃可愛い女学生に囲まれていたせいか。でも、彼の結婚を知った同窓生たちは、「稲葉先生ずい、一番可愛い成績のいい美人の生徒をお嫁さんにするなんて」とやっかみ半分その結婚を祝していた。老人もその妻女の学生時代を憶えていた。線の細い美しい娘だった。松田の人だったこと。

宇佐美の町をすぎ田園が山ぎわにおしつまった所、タボの木が茂った山裾に彼の家があったとおぼえていたが、三十余年たった今は住宅の波が山脇まで押し寄せすっきり変わっていた。

道々聞きだしやっとなぞ探してた。山田という字だった。山裾の位置にあり、山の木々はやはり家を覆っていた。やっとなぞの姿を思い出した。

伺を通じたが中々出ない。飼犬だけが烈しくほえていた。るすかな?一時たつて、やっとなぞの女の声が聞えた。静かに開いた扉の間に女の顔があった。三十

年もたつていたがよくおぼえていた。化粧もしない寝た姿が二人の老人を三階の位牌の前に導いた。山の斜面に建った家は登窯のように三階建に山の側面を

這い上がった。あとで分かったがその一階が彼の書齋であり書籍がうす高くあつた。

位牌の前に置かれた見覚えのある顔が写真の中で笑っていた。その笑顔と、うちひしがれた細君の間の大きな落差に二人の老人はとまどつてしまった。月並みの悔やみの言葉もはばかられてしまった。

水屋をへだた茶室に席が変つたので、出来るだけ明るい話で、雰囲気座を交えようとしたが…  
「わたし、寝られないの。まるで夢をみているよう、つらいわ、お菓飲まないと眠れないの」

昔の教師に半分甘え、気を許してか、今の苦痛を訴えつつけた。

夫が倒れた時の様、新設の病院にかつぎ込まれ不備の新設病院の中、余り手厚い治療・看護を受けられなかった不平をかばい声でのべた。

「病院で疲れを訴えるの、わたし何も出来ないの、でも夢中で背中をさすつたわ。そしたら、俺は前からそおやって摩つてもいられたらなんだ。いい気持ち、有難うっていうの、あまりいつも聞かない言葉なの、それを聞くのと、とても淋しかったわ。そのあとラーメンが食べたって

云うの。お医者さまのお許しを得て食べさせたわ。小さなカップラーメンを。」

老人はそのラーメンの話聞いて、突然大声をあげて笑いだしてしまった。昔から稲葉のラーメン好きは知っていたが、死を目の前にした大病の中で、小形のラーメンカップをすする彼の哀れな姿を思うと、どおしたはずみか、すっとんきような大声をあげてしまった。その笑い声は、驚く妻女、Oの上を越え、虚しく虚空に飛び、散じ、その場にあわぬ老人の非礼の高笑いをあざけりながら消えていった。

そして老人は大きくうなだれ、深い自己嫌悪に陥っていった。Oは稲葉の履歴と、案外大量の出版物を丹念に調べ、不足の部を妻女に聞き足していた。

そんな作業に不向きな老人は窓を開けて外を眺めた。鉄道線路の西側の山、段々の柑子畑の上に墓地も段々に並び、その上に小さな墓石も凸凹に並んでいるのが夕日の中に見えた。多分あの中に彼の墓もあるのだろうと思った。

Oの資料調べも終わった頃、一組の若夫婦の弔問があった。稲葉が中をとりもった組のようだった。それをしおに、老人達は去ることを思い、そのむねを妻女につげた。

川柳

高井喜雄

母さんは昔夜なべ今パート

出欠の会費を迷わず招待状

神様も専門がある守り札

妻の愚痴友の出世のとはっちり

司会者は受賞の歌手が泣くを待ち

「駄目、駄目、先生もう少し居て、私、淋しいの、一人になるのいやなの」

階下から、ビールとワンカッポの日本酒、南京豆、いかにも台所に散らかっていた物を、急

いできき集めて来たようだ。それまでして客を止める動作が、愛おしく、哀れだった。二人の老人は深いため息をつき、苦いビールをすすった。

弔問の若夫婦を送り妻女が席にもどった。夫婦の間には子供が出来なかった。稲葉の両親も今はいない。親戚の者は皆無でもないようだ。だが今現在、この地で彼女を直接助ける人は殆どいないようだった。今後のこと、相続・財産の管理。急な出来事で病氣らしい病氣もしい丈夫だった夫の急死、残された一人ぼっちの病弱な妻女には何一つとてても手に負えぬものようだった。そして、それにおびえていた。

だが老人達もそんな問題に直接手を貸すことは出来ない。唯頑張れと云うだけで、それも病弱な、又急に、大きなショックを受けている彼女には酷だ。何も出来ぬ二人はともどもせめて明るい別の話しに話題をかえるぐらいだった。

稲葉の家のことに話をかえた。伊東地方には稲葉を名乗る族が多い。彼の家もその中の一つかとも思っていた。そして、それを問うた。

「いいえ、違います。春日局のお話に出る稲葉ではないと主

人が云っておりました。美濃の斎藤道三の家来、道三が信長に滅ぼされた時、逃れて此処に住みついたのですって、だから主流派ではなかったのよね」歴史家の細君の頬に少し赤みがさして来た。

東京芝の竹島小学校・府立六中と幼少の頃からこの地を離れていたことに対しては、父が都の交通局に勤めていたと云う返事が返ってきた。

戦後の混乱の中、旧制の新潟高校・東大、あの時代だから余り勉強、学問をする雰囲気ではなかったらう。

新卒から定年退職まで一つの高校に勤め上げたこともめずらしい。それに、通勤に宇佐美くんだりから二時間もかけて……学校の管理職(校長)を望むことを若い頃から拒否して、前に彼からも、また、この席で細君からも聞いた。

史・歴の跡を追う学徒としての彼の心根を新たに感じた。まだ、若い時代、老人達と城内の教員室で戯れていた頃には、最近の関東地方諸国の、死の直前には甲信越まで、その地に根をはった佛蘭の地道な研究・掘り起こし、そんな影は感じられなかった。老人達が夫々、己れが道に進み、分かれてから彼は研究・執筆の速度を速めていった。そして相当の成果をあげて

いた。

永年の勤めをやめ、執筆生活に没入しようとした矢先の急死。彼は絶えず忙しいと云っていた。会があれば必ず遅参して来た。何がそんなに忙しいのだ。もう少し落着いたらと思っていたが、自分の早い死を予測していたのか、逆に、多忙が急死に追いついたのかは知らぬが、何はともあれ惜しいことだ。

妻女はまだ留まることを望んでいたが、夕日が西の山を染めてきた。墓のことを尋ねると前記の段々墓地がやはりそれであった。窓を開けて遠くから拝し、墓参にかえた。

帰途、二人の老人は殆ど口を開かなかった。

自分たちより十歳も年下の彼の死。今後俺達の死、死に様、植物人間と化し、点滴で無意味に生き延びる無惨さを思い、二人とも深い溜息をつき、逆に稲葉の淡白な死を気持ちの中でうらやんだ。

だが、病弱な妻女の消え入りそうな嘆きの前に、何も出来ぬやりきれなさに、無力さに、深く落ち込んでいった。

# 北村透谷と交友のあった 紅蓮洞・坂本易徳 ④

## その挫折の人生

岡部 忠 夫

小田原が明治維新後衰退していった理由は、優れた指導者がいなかった、という人の面より、小田原をとりまく風土・環境などの地理的な角度からみたのがよいというのは、改めて言うまでもないが……。

仮に指導者に優れた人物がいて、倒幕側に加担したとしても(無理なことだが)、指導者層の何名かが維新政府に仕えても、その職も精々県令どまりで、小田原の衰退という時の流れにさして係わりあいを持たなかったのではないか。

小田原は、気候に恵まれて、住みよい土地ではあるが(今では 外来者の中には住みにくいという意見を聞くが、これは別の視点、主に閉鎖性という点であろう)、人口の支持力の弱い土地であった。

当時、産業の基盤である稲作農業は、酒匂川流域の村むらであり、その地域は狭く、米の産出高は限られ

ている。おまけに酒匂川は、

ときどき氾濫をして耕地は何年かは駄目になってしまいう。特産物もない。漁獲といっても、当時の沿海漁業では、その収量は知られている。商圏は、足柄上、下両郡のほか、小田原藩領であつた伊豆東海岸や駿河の東北部といった限られた地域で、何代か続いた商家や素封家は存在しても、富豪が育つ風土ではなかった。

箱根の関所を守る責を負わされた小田原藩、城下町宿場町としての賑わいも、見方によれば人為的に成立してきたと言えないこともない。

このような小田原の地に失業旧藩士のかかりは、明治十年代の中頃迄は、ずっと住み続けていた。

明治四年(八三)七月の廃藩時の藩士の数が一三四八人(一六ページ表参照)。一方同十六年(八六)は、一六三戸(『明治小田原町誌』)。

直接明治四年と同十六年の数を対比するのは適当ではないが、その傾向は分る。現在、南町の西海子通りの旧武家屋敷通りは、かつて、中・下級武士の家が十七軒あつたところである。

ところが、現在 江戸時代からずっと続いているのは、有浦家が一軒だけである。あとは、持主が替わって、なかには持主が三、四回も入れ替わっているところもある。

この現象は、士族の生活の窮乏を示すものであり、時期は明治十六年以降のことになる。それを裏付ける資料として、先に挙げた『明治小田原町誌』がある。明治十六年六月、小田原駅五方町戸長惣代の興津敬基が諮問により足柄下郡長関重鷹に士族の実状について上申しているのがそれである。

戸数千四百戸 旧小田原藩十八拾壹戸荻野藩七戸他藩拾六戸

内

可ナク生計ヲ維持スルモノ 参拾貳戸  
辛ク生計ヲ立ルモ追々生路ヲ失スル至リシモノ

### 訃報

山崎逸男氏(酒匂二一四四一〇 本会会員) 昨年十月十六日逝去されました。享年七十歳。

市川邦雄氏(南町三一〇一七 本会会員) 四月八日逝去されました。享年七十四歳。御冥福をお祈りします。

ノ 九百八拾九戸  
目下飢餓ニ陥ラントスルモノ 八拾参戸

当駅士族ハ旧藩主減高以來別テ困難多キノ処去明治九年頃ヨリ客年ニ至ル迄引続物価意外ニ沸騰シタル故従来無産ノ士族ナルハ猶活計ノ目途ヲ失ヒ御下附ノ公債証書及株券等モ追々売却又ハ借用金ノ爲抵当ニ差入甚困難ノ余リ夫々有志相謀リ種々ノ商業ニ従事シ又精米社等組織スルト雖モ何レモ破産シ基ヨリ営業不馴ノ士族ニシテ他ニ資本金ナク夫レカ爲公債証書或ハ株券等ヲ失シ又第四拾四国立銀行ニ加入ノモノハ客年十月第三銀行ニ合併ト相成互解同様ノ姿ニテ株主ノ損失不少旁々目今ノ量況極難トハ相ナレリ

明治九年頃より十五年頃迄物価が騰貴したこと

西南戦争の戦費調達のため引き起されたインフレーションである。

額面百円の公債は明治十一年(八七)には、八十二円二十銭、十三年末には六十円七十三銭の値段にさがってしまった。

米価は、明治十四年四月白米一俵が四円六十八銭と明治七年二月の一俵一円五十銭に較べると倍近くの値段となつてはいる。

〔註〕小田原駅五町 全国に町村制が施行されたのは明治二十二年(八九)。五町とは新玉町・万年町・緑町・幸町・十字町で、明治六年(八三)七月、小田原の宿駅が五つの町名に分けられ、この町名は、住居表示が変更されるまでの昭和四十一年(五六)三月末迄続いた。

〔註〕戸長 明治四年(八〇)戸籍法の制定により戸籍事務施行の末端機関として設けられた区の長。従来の名主、



庄屋がこれに当たった例が多い。のち区が町村行政機関に転化するに伴い一般行政事務を扱った。身分は官吏に準じた扱いを受けると共に、住民代表としての両面性を持っていた。

〔註〕郡長 正式には明治二十三年(一八九〇)法律で郡制が制定されてからで、郡長は郡会郡参事会と共に郡の機関であった。郡は大正十二年(一九二三)廃止され、郡長は同十五年に廃止された。

旧小田原藩の士族たちの多くが生活に窮するなかで、坂本易徳は、比較的恵まれていたことになる。前にも記したが、小田原中学校(県立小田原中学校ではない)に、明治十三、四年(一八八〇、八二)頃入学し同十六年頃、遊学のため上京している。

易徳は、中学入学する三、四年前の、西南戦争があった明治十年(一八七五)十三歳のとき坂本家の養子となり、姓は村岡から改まった。この事は、以前にも記した。養子となったのは、兵役を免れるためであった、と田村うめさんは言う。易徳はうめさんの大伯父に当り、晩年の易徳から直接聞いた話なのだろうか……。

明治五年(一八七〇)十一月徴兵に関する詔勅が出され翌六月一月、「徴兵令」が布告されたが、「一家ノ主人タル者」(嗣子並ニ承祖ノ孫)「独子、独孫」は、兵役を免除された。他家の養子となれば、兵役に服さなくともよい訳だ。「徴兵令」は、同十二年(一八七九)同十六年(一八八三)と改正されているが、兵役免除の大筋は変わっていない。

養子となって徴兵を忌避する知恵は、易徳の年齢からして、彼自身の考えではなく、親の意向によったものであろう。

あるいは、親たちは、戊辰の山崎(箱根町)の戦いで、同士相打つ悲劇をつぶさに体験していて、「勝てば官軍、負ければ賊軍」といった意識を強く体の中に刻み込んでいたのかもしれない。

ともかく、易徳は、中学・大学と、勉強できる環境に置かれたのである。もと、数十石の下級藩士でも子弟に高等教育を受けさせることが出来たことになるが、その学費は、どうして工面

されたのであろうか……。勿論、親たちにとっては、学費の捻出に苦労したことは想像できる。廃藩置県で、藩士が失業した際の退職金の一部も充当されたことであらう。

それでは、退職金ほどの程度支給されたのであろうか。このことを記す前に、維新政府が 明治三年(一八六八)十月四日(陽曆九月十日)諸藩に命令した藩制改革について触れよう。

その命令は、藩の職制、政府への納付金、軍費、家祿などについて、全国一律の基準を定めたもので、このうち、藩財政についての一部を記してみると、

① 藩の石高は、すべて草高(領内で産出する米の総高)ではなく、藩が収納する現石(実収入高)で示すこと。

② 藩財政については、現石が仮に十萬石とする

と一割の一萬石は知事の家祿(旧藩主が藩知事となった)に充てること。残りの九萬石の一割の九千石のうち半分は、海軍の資金として政府に上

納すること。残り半分を藩の陸軍の費用に充てること。

残る八萬一千石は、藩政の政務諸費と、士族、卒族(足輕・同心の輕輩の武士だった者。卒族は、明治五年に廃止され、世襲の場合は士族、一代限りの卒は平民となった)の祿に充てること。

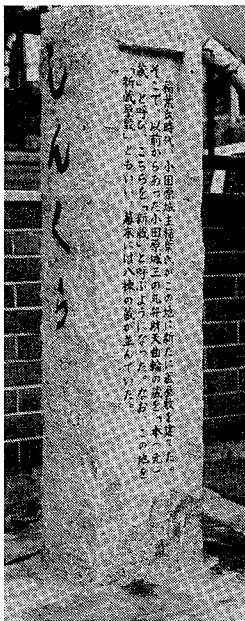
③ 藩債の償却返済は、藩の政務費からでなく、知事の家祿、士・卒族の祿から一定の比率でもって償却すること。

この維新政府の命令によって、各藩は、明治三年から四年にかけて、祿制改革を行った。改革は、藩によって異なり、吉川秀造氏が『士族資産の研究』で各藩の祿制改革を次のように分類している。

- 1 累進的削祿法
- 2 均祿法
- 3 士・卒の家祿を全部一律同額に定める
- 4 一定限度以上は、比例・均祿併用法
- 5 例率、以下は均祿法
- 6 戸口制 家祿を廃し、一戸内の人員に応じて口米を給する
- 7 祿券法 家祿を改め、家産として、これに券状を交付して自由売買を認める
- 8 その他

以上のうち1の累進的削祿法が最も広く行われ、これをさらに、(1)純然たる累進的削祿法、(2)累進的削祿法、(3)階級的累進削祿法の三つに分ける。2の均祿法と、4の戸口制は、最も窮乏が甚だしい藩が行った。

小田原旧町名保存碑「新蔵」小田原駅附近



小田原藩廃藩時の藩士・卒祿高

廃藩 明治4年7月14日

元高 現米 改正現米 藩債支消 現米 人員	元高	72,876石7斗6升
	現米	15,832石8斗7升1合
	改正現米	13,913石8斗
	藩債支消	2,470石8斗
	現米	11,444石
人員	1,224人	

元高	人員	改正現米	藩債支消	差引現米
570石以上	18人	20石	5石	15石
500石	5	20	7	13
460~	122	17	4	13
100石	317	14	3	11
90~30石	43	14	3	11
その他A	251	11	2	9
その他B	468	7石6斗	6斗	7
卒族				

〔註〕1 その他A 「是ヨリ以下親之勤功其身之功  
 勞ニ寄一代士族三等給ニ差出候者、襲家毎節四等  
 給ニ差出候者」元高50石1斗8升2名、同41石8  
 斗8升1名、同37石1名の計4名を含む。

〔註〕2 その他B 「是ヨリ以下親之勤功其身之功  
 勞ニ寄一代士族四等給ニ差置候者、襲家毎節卒五  
 等給ニ差戻候者」

小田原藩の場合、1の  
 累進的削祿法の分類に入る。  
 次の表は『小田原有信会  
 文庫』の「廃藩之際小田原  
 藩士・同卒祿高取調帳」よ  
 り作成したものである。資  
 料が作成された時期は、  
 「辛八月 小田原県」とあ  
 り、明治四年(一八七二)に記  
 録されたのが分かる。

明治六年(一八七三)十二月  
 になると、維新政府は、家  
 祿・賞典祿百石未満の奉還  
 者に対し、永世祿(家祿)  
 は祿の六年分、終身祿(一  
 代限りの祿)は四年分を、  
 年限祿はその年数に応じて

一年から四年分の範囲で、  
 現金と秩祿公債と、それぞ  
 れ五〇%ずつ支給すること  
 を示達している。

賞典祿は、函館戦争まで  
 加わった者への加俸で、旧  
 小田原藩士には関係がない。  
 支給の基準の祿高は、明治  
 六年の各府県貢納石代相場  
 で金額に換算された。公債  
 は、年利八分で一回払、二  
 年据置後、七カ年で償還、  
 額面三百円、百円、五十円、  
 二十五円が発行された。  
 七年(一八七四)十一月にな  
 ると、百石以上の者にも、  
 奉還が認められたが、五十  
 石分が現金で、それ以外は

すべて公債が支給された。

坂本易徳の養父坂本正武  
 の家祿は六十七石、改正現  
 米を仮に十四石とすると、  
 その六年分の八十四石の支  
 給で一石の相場を、次に記  
 すが四円一錢一厘三毛七糸  
 で換算すると、三百四十五  
 円五十五錢八厘となる。

一石の相場の四円一錢一  
 厘三毛七糸は、政府が退職  
 金の支給基準を示達する五  
 カ月前に、足柄県で士族岡  
 本貞然(徳太郎)が家祿七  
 石六斗の返上願いを出した  
 際、他の士族の奨励になる  
 からと、賞典が与えられた

際の換算額による。

これは、明治五年の貢納  
 相場が基準になっているが  
 政府が退職金の支給基準を  
 定めたときの換算が、明治  
 六年の貢納相場によったと  
 しても、その額が大幅に変  
 動しなかったと仮定して一  
 応、五年の貢納相場によっ  
 てみた。

易徳の養父正武が受取っ  
 たと仮定した三百四十五円  
 は、現在のどの程度に相当す  
 るか……。しかし、米の価  
 格だけで換算しても、その  
 実態は明らかにつかめない。  
 それで、明治六年(一八七三)  
 政府が定めた各府県の判任  
 官以下の月給と比較してみ  
 よう。

十二円と十一円、等外が十  
 円から五円の範囲。

一応、属の月給の最高と  
 最低を単純平均すると、三  
 十四円で、中属下等がこの  
 額になる。坂本正武が受け  
 たと推定した額は、中属下  
 等の十カ月分に相当する。  
 この程度の額では、他に  
 収入の道がなければ、たち  
 まち底をついてまう。病気  
 でもすれば、社会保険のな  
 い時代であるから、困窮し  
 た生活を送ることになる。

坂本易徳が慶応義塾に入  
 学してから、養父の援助を  
 受けたと思われるが、やが  
 て学費に窮したと思われる  
 ふしがある。(続)

川越へは七月八日(日)に

属で判任官の最高が大属  
 上等の七十円、最低は権少  
 属下等の十八円。他に史生  
 が十五円と十三円、県掌が

本会の次の日帰り歴史探  
 訪は川越。見学場所は次の  
 通り。春日局ゆかりの喜多  
 院、川越城主松平家墓所。  
 屋敷は喜多院隣の店で名物  
 松花堂。その後三月開館し  
 たばかりの川越市立博物館  
 蔵造り風の建物、内部施設

は素晴らしく新聞で絶賛を  
 受けた。学芸員が説明に当  
 る。北条氏康が両上杉軍を  
 敗った日本三代夜戦の一つ  
 川越夜戦跡東明寺住職が説  
 明予定。他に、蔵造り資料  
 館、時の鐘、家並み、菓子  
 屋横丁(いもが原料の菓子  
 土産に適)。

私の早川村誌(十)

紀伊神社埋経三筋壺について

青木友吉

紀伊神社 露木清司様

平成元年七月三十日拝見致しました三点の資料、一点は常滑の三筋壺、製作年代は平安時代末期に相当し、一点は渥美窯の灰釉壺、同じく年代は平安末期、一点は中國宋代の青白磁小壺に相違なく、三点の在り方からみて平安時代に造営された経塚に関連するものと推定されます。

中世考古学上大変貴重な資料であること間違いございません。

常滑市民俗資料館

学芸員 中野 晴久 ㊦

そもそもこの壺の話は大正六年(一九一七)に始まる。

この年現JR東海道線工事のため村の鎮守紀伊神社が山の手一五〇米程度移転のための工事中に、神社の下から、方形に石に囲まれて三個の壺が発掘された。

神社の地山を切崩し、鉄橋を架け、参拝者はその下をくぐらねばならない。この土木中に壺が発掘されたのであるが当時の関係者は皆鬼籍に入っているのです。その詳細は知る由もない。

この壺を海で洗った人達はすぐ死んでしまったり、気が狂ってしまったという不気味な伝承を残して村人も觸らぬまゝ、七十四年も神社の倉庫に眠っていたのである。

『新編相模風土記稿』によると、

紀伊宮権現社、本地地蔵を置、村の鎮守なり、祭礼六月二十四日、村民持天正元年(一五三三)の鐔口・貞享元年(一六四四)の鐘があり

序文に木之宮と題す。祭神・五十猛命・井木地挽、轆轤の神・惟喬親王を祭る。とある。

惟喬親王は早川の里で没せられたことになっている加藤文書によるものであるが、惟喬親王は貞観十四年(八七三)に出家され、寛平九年(八九二)に没せられている。墓は小野ノ里(滋賀県)にある。

相模國司大江公資が、妻の相模と共に相模に赴任したのは、寛仁四年(一〇二〇)のことであり、四年任期を終えて京に帰ったのが萬寿元年(一二四四)のことである。この年早川眞福寺覺應により開山される。本尊は不動。

大江公資はこのときに早川の牧を私領として獲得したのではないだろうか。牧は川の流に近く丘陵・山野を必要条件としたと説く説もあり、早川の右岸には前平時・中平時・大平時・平時・奥平時の地名が存在し、牧から田への変化を思わせるが如何なるものであろうか。そして長歴年中(一二七〇-一四〇)にこの牧を民部卿長家に寄進した。公資は長歴四年に没している。

(左) 三筋壺・(中央) 青磁・(右) 灰釉壺



『古仏微笑―かながわの仏像』(昭和六十年五月一日朝日新聞社発行)の中に早川観音菩薩立像を、十二世紀前半ごろの作風がうかがはれ、たおやかな風情と何かを黙想している気配が感じられる、といっている。

冒頭の常滑市民俗資料館鑑定は、当時の早川庄の、社会・経済・民衆の昂まりの成果であって、勸進僧又は修験者による埋経であったとしても、これらの背景を考えざるを得ない。三筋壺とは、壺の胴中に三本の横線文様があるもので、三重のもの、二重のもの、単線のものがあり、単線のもの是最も後期に属するものといわれている。この三筋壺は一部猿投窯や渥美窯で製作されているが、その大部は知多半島の窯で焼かれ、愛知用水建設の折に三千余の窯跡が発見され

# ちよっぴりカルチャーショック

絵と文 佐久間俊治



先般、息子がアメリカで知り合ったあるヨーロッパ人が、我家を訪れたときのことである。これは、あまり国際的でない我々にとっ  
てはか  
なりの  
経験で  
あった。  
その客  
は約一カ月間、名古屋・大阪・奈良・京都・広島など各地を、二回に分けて小旅行をしたのだが、その合間と終りの二度、数日ずつ当  
家で過ごした。案内して回った息子は別として、家内、娘、そして私の三人がそれぞれちよっぴりとしたショックを受けたのである。

言葉がやはり一番の問題であった。一度目のとき、客が滞在している間は緊張していたせいかわりもなかつたらしいが、二人が小旅行に出かけた直後、家内がダウンした。英語で相手をしようにとして、三十年間使わなかつたためにすっかり錆び付いている脳の一部を急に無理矢理に使おうとしたためらしい。すぐに治ったがその時は完全にグロッキーで、横になったまま頭も上がらなかつた。深田祐介氏の文に「だれしも感じる恐ろしさですが、アジア人同志だと、おなじ下手な英語でも、通じかたがまるで違うのです。」という部分があつたが、相手がヨーロッパ人であつたせい、下手

たという。十二世紀千百年代に埋経の思想の流行と共に盛んにつくられた。埋経の教義は比叡山天台宗の三代法主円仁によるものといはれている。円仁は延暦十三年(794)に下野に於いて生誕し、貞観六年(864)に没している。貞観八年(866)慈覺大師と追諡されている。寛弘四年(1003)に藤原

道長が、大和國金峯山に埋納した経筒は経塚遺物のなかで最も早い事例として知られているが文献としては覺超の「修講式」(永延三年、911)のなかに「仏を圖し、経を書きて卒塔婆を立て、其の基に件の仏、経并に人々の名帳を納めて」とあり、すでに埋経の行われていることが記されている。埋経の願意は、

「慈尊出世五十六億七千萬歳之曉」  
「爲過去祖父相母成仏成」  
「爲父母孝養」等々  
「現世利益や、追善供養の思想を表わすものが多い。慈氏は弥勒の漢訳である。弥勒菩薩は、釈尊の次に仏陀となるべき菩薩で、釈尊の没後五十六億七千万年たったとき、兜卒天からこの世に下生して、仏陀にな

るといわれる未来仏である。神社床下の三個の壺は、方形の石圍いの中にあつた。発掘者は海に持参し、洗い清めてしまったので内容物の確認がなされなかつた。三個の壺はいづれも口辺が意識的に欠いてある。いづれも蓋がない。村人の心の中には加藤文書による惟喬親王伝承が色濃く残っている。親王のお骨ではとの危懼の念があり、崇りの伝承が生まれたのではないだろうか。加藤文書は木地屋文書ではあるが、小田原市の重要文化財に平安の椀があり、当地の木地師の活躍も考えられる。山の中に六郎石(ロクロシ)の地名もある。平安の早川の牧から庄への発展、國司大江公資から始まり、曾孫の大江仲子の訴訟問題、早川親首像の彫技のこと。眞福寺の万寿元

東京夏期大学講座  
七月二十九日(日) 一時半 入場無料  
「禪と実業」社 富士経済 阿部英雄先生 長  
「秀吉と小田原合戦」いわか明星大学教授 安井久善先生 軍事史学会 長  
(主宰・会場) 小田原市久野一五六五 東泉禅院  
電話〇四六五―三三―三三四一 番

年の創立。『皇國地誌』に記されている秀吉小田原攻の折の鍛冶屋といはれる金掘沢は実は、砂鉄による製鉄跡であること。源頼朝石橋山で平家と対戦の始め、早川尻に陣をとつたが、早川党の諫により石橋山に陣を移した。後背に箱根権現あり、西南に伊豆山権現の存在は、修験者にして、勸進僧にして、早川の地に埋経が行なはれても、おかしくはない社会状況であつたと考えられる。

参考文献  
『半田市誌』 中野晴久  
『仏教語源散策』 中村元  
『日本人の仏教史』 五来重  
『経塚』 関秀夫  
『小田原地方史研究』(創刊号・二号) 福田以久生  
「大江仲子解文について」『全補論』 山田泰弘  
『古仏微笑』 山田泰弘  
『新編相模風土記稿』  
『神奈川県皇國地誌残稿』

さ加減がひどかったためか、たしかに大変な苦勞であった。娘はホステス役でない気楽さと若さまで、床に伏すようなことはなかった。

次に感じたのは、その客が、自分の国について要領よく説明できるということである。歴史的に見た自分の国の人権や民族のこと、第二次大戦中のこと、戦後

のこと、また隣り合った国々のことなど、正しいかどうかはこちらには分からないのだが、対話のなかで極く自然に話した。島国でないため、民族も混じり合っているようし、国境も何度も変わったことであろう。そうした歴史を背景にもつ人々は、自分の国について、あるいは隣りの国についての感じ

方や知識は、おそらく日本人の場合と大きく異なっているのではなからうか。

日本について、その客は、大変豊かな国であり、またよく聞くことだが、日本人はみな親切だと感じたようだ。それから、街で見える人々の後ろ姿は、ヨーロッパ人と同じような服装なのに、髪がみな黒いこと、そして

顔を見るとみな日本人であるのが、当たり前のことなのだが何か不思議な感じがするとともに言った。日本の伝統的文化である茶や生花などについても強い関心を持っていて、両方とも短時間の実習を楽しんだ。「折り紙」は日本独特のものなのか面白がって、「つる」「ゆりの花」などいくつか覚えた。

指先の使い方をしていると、やったことがないせいか、器用さに欠けるように感じた。手でいろいろな形をつくつ「影絵」は、その国にもある遊びらしく、「犬」「狐」などが同じであるのには少し驚いた。灯りの下で長年生活している間に、それぞれの国で(あるいはもともと)多くの国々で共通の遊びをつくり出したのであろう。

さて出発の日、四個の荷物を前にして、飛行機搭乗手続きのときに預けるのはどれで、機内に持ち込むのはどれかときいたとき、折り目正しくおとなしかったその客は「これとこれ」というように、ポケットに両手を突っ込んだまま、二つの荷物を足で軽く蹴った。

## 丹沢の植物 ④

城川四郎

丹沢にお花見に行くといえ、それは丹沢の名花シロヤシオの観賞に出かけるんだなと思っていだろうか。シロヤシオの別名はゴヨウツツジである。五葉つツジと書いた方が一般の方にはわかりやすい。シロヤシオはそれらの名前で示されるように白い花を開き、葉が五枚つツツ生しているツツジの一種である。

ツツジの仲間では五枚輪生しているのは本種だけだから覚えやすい種類のツツジである。

このツツジは太平洋側の温帯域(ブナの生えるくらいの高さ)に広く分布して

いる植物で、決して丹沢の特産などというものではないが箱根には少なく丹沢には目立って分布が多い。花期は五月中旬から六月にかけての頃であるが、その年の気候条件で盛花期は微妙に動く。

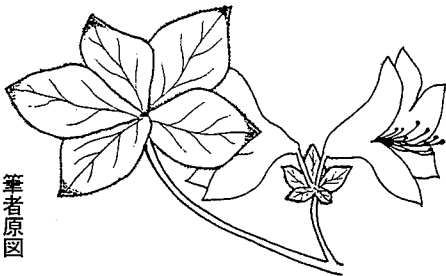
さて、このシロヤシオの観賞には二つの楽しみ方がある。一つは樹形で、一つはもちろん花である。樹形を楽しむのは必ずしも花の時期とは限らない。日頃、盆栽にも美術にもまるで無縁の私でも丹沢のシロヤシオの前ではその枝ぶりや葉の素晴らしい調和に見惚れてしばしば芸術家になる。

花を楽しむには、実は共演者が要る。シロヤシオがたくさん生えているといっても、それだけで群衆を作っているわけではないから霧島や雲仙のミヤマキリシマのように花が山を埋めつくすという状況ではない。ブナを主とする夏緑常緑樹林の新緑のなかに共演者のトウゴクミツバツツジが紅紫色の鮮やかな花を咲かせるのに混じってシロヤシオの白い花が点々とひきたつのである。この情景を観賞できるのは、丹沢でも人為的影響の最も少ない原生林に限られる。そんなわけでこの丹沢のお花見は、自動車で乗りつけて一杯やりながらというわけ

シロヤシオ(つツジ科)

Rhododendron Quinguefolium

Bisset et Moore



筆者原図

にはいかなない。

箒沢から檜洞丸に登るコースに「つツジ新道」と名づけられている登山道があり、そこはシロヤシオなどツツジの観賞コースとして知られている。

木暮次郎回顧展  
七月六日(金)〜八日(日)  
オービックビル商店会では、同ビル開設十周年を記念して、故木暮次郎氏の遺作『小田原古きよき頃』原画展を、来る七月六日から八日の三日間十時から六時まで同ビル三階(小田原銀座)に於いて開催する。

# 会員消息

◎春の叙勲で次の方々が受賞されました。おめでとうございます。  
 川崎福松氏(勲四等瑞宝章 総理府行政 浜町)  
 興津繁氏(勲五等瑞宝章 教育)

廣澤富正氏(勲五等瑞宝章 調停委員 だるま・小田原魚市場 社長)  
 なお、廣澤氏は五月一日県民功労賞(保険衛生・県食品衛生協会会長)を受賞、重ね重ねの栄誉おめでとうございます。  
 ◎中島まさ氏(飯田岡)がこの

(浜町)

## 平成二年度総会 会長に高田喜久三氏

平成二年四月八日(土) 十三

時より小田原市立郷土文化館において開催。平成元年度の事業報告、決算報告、監査報告、並に平成二年度の事業計画及び収支予算が承認され、ついで役員改正で会長に高田喜久三氏が選出された。次に相澤栄一前会長に記念品が贈呈された。引続いて、中央大学教授・小田原市史編纂専門委員の金原左門氏による「福澤諭吉と小田原」と題した講演が行われた。

事業報告、決算報告、事業計画、収支予算は次の通り。  
 平成元年度事業報告

◇総会 平成元年四月十八日  
 講演「小田原と北条早雲」講師・立木望隆氏 市立郷土文

たび、歌集『東海道五十三次歌行脚』(B6一五六ページ)を出版された。史談会創立三十周年記念として二年間に十四回に分けて実施された東海道五十三次宿場史蹟めぐりの道中歌で、丁度百十四首が載せられています。  
 中畑信雄氏は「読んで楽しい歌集、見て楽しめる歌集」というのが第一印象であると、巻末に評されていますが、まさに、そういう思いがします。

追分宿にて



中島まささん

◇十一月廿六日(日)・廿七日(月) 一泊

歴史探訪 上州方面

◇一月廿五日(木)

初詣 多摩陵・武蔵野陵

高尾山葉王院有喜寺

◇二月十日(土)

講座「小田原・箱根の浮世絵について」講師・岩崎宗純氏

湯本・正眼寺にて

◇二月十七日(土)

史談会沿革調査座談会

合掌苑にて

◇九月十七日(日)

小台・蓮乗寺にて佛像拝観後懇談

◇十月一日(日)

北条幻庵四〇〇年墓前祭参加(会長)

◇十月十四日(日)

史跡探訪 山王、江戸見付方面

会報発行

第一三七号(第一四〇号)

四回発行 編集委員会

理事會	1/8	1/16	1/13	1/10	1/6	1/8	1/9
副會長	1/9	1/6	1/13	1/10	1/6	1/8	1/9
會長	1/9	1/6	1/13	1/10	1/6	1/8	1/9
常任理事	1/9	1/6	1/13	1/10	1/6	1/8	1/9
役員	1/9	1/6	1/13	1/10	1/6	1/8	1/9
長	高田喜久三	曾我 保夫	富田 千春	和田 登	岡部 忠夫	西山 鮭太郎	吉崎 ヨシ江
副會長	曾我 保夫	富田 千春	和田 登	岡部 忠夫	西山 鮭太郎	吉崎 ヨシ江	
會長	高田喜久三	曾我 保夫	富田 千春	和田 登	岡部 忠夫	西山 鮭太郎	吉崎 ヨシ江
常任理事	曾我 保夫	富田 千春	和田 登	岡部 忠夫	西山 鮭太郎	吉崎 ヨシ江	
役員	高田喜久三	曾我 保夫	富田 千春	和田 登	岡部 忠夫	西山 鮭太郎	吉崎 ヨシ江

とは

なお、第二部はおりおりの歌を「昭和終焉」で結んでおられるが、平成に入っても、さらに歌による自分史が綴られることでしょう。

◎本年度、次の方々が会員となられました。(敬称略)

- (南町) 柳川孝文、澤田栄一、松本敦子、間中節子、田中元一。(城山) 廣瀬康子。(栄町) 小澤重治、杉山正喜。(浜町) 吉川保、高田知予子。(東町) 田代一郎。(入生田) 日野泰輔、本島安平、滝本みき、杉本包子、久保いそ。(久野) 布施洋子。(飯田岡) 柏木ミツ。(清水新田) 太田幾喜、小泉光江。(小台) 小川登姉子。(鴨宮) 内田美枝子。(南鴨宮) 本多康子。(酒匂) 大川務、原達夫。(南足柄市) 田中光子。(松田町) 遠藤茂子。(開成町) 高田稔、佐久間澄子。(湯河原町) 渡辺昭子。(平塚市) 河部純子。

### お知らせ

本年度から、本会の連絡所が次の住所に変わりましたのでお知らせ申しあげます。

小田原市栄町

二丁目十三番二十号

アオキ画廊内

電話(24)〇六三七



平成2年度編集委員会予算

区 分	収 入	支 出
前年度繰越金	726円	
一般会計より	400,000	
特別賛助会費	560,000	
預 金 利 子	1,274	
会報印刷費		800,000円
編 集 費		75,000
取 材 費		34,000
会報発送費		38,000
事務用品費		15,000
合 計	962,000	962,000

平成元年度史跡めぐり収支決算書

月 日	名 称	人 員	収 入 額	支 出 額
月 日	前年度繰越金	名	246,921円	円
7・27	真鶴史跡めぐり	45		10,000
10・14	江戸見付・山王 "	47	23,500	21,300
11・26~27	上州方面 "	21	509,000	480,377
1・25	高尾山初詣	52	266,000	260,080
	預 金 利 子		3,258	
3・31	事業基金へ繰入れ			100,000
	次年度繰越金			176,922
合 計			1,048,679	1,048,679

理 " " "  
事 " " "  
(会員)

監 事  
和 田  
登

小西 石井 吉池 飯田  
正一 艶子 清 悟郎  
理  
事

平成2年度 収支予算 (一般会計)

(収入の部)

区 分	予 算 額
前年度繰越金	60,841円
会 費	890,000
市 補 助 金	24,000
雑 収 入	4,159
合 計	979,000

平成元年度 収支決算書

(収入の部)

区 分	決 算 額	付 記
前年度繰越	52,949円	
会 費	890,000	356人
市 補 助 金	24,000	
雑 収 入	9,259	利子 4,259円 祝儀 5,000
計	976,208	

山田 小野 山口 飯沼  
寿子 意雄 貢 恒雄  
理  
事

(支出の部)

款 目	予 算 額
庶 務	211,000円
総 会 費	33,000
会 議 費	23,000
会 員 連 絡 費	90,000
交 際 費	50,000
事 務 用 品 費	15,000
会 員	128,000
振 込 手 数 料	5,000
名 簿 印 刷 費	65,000
名 宛 印 刷 費	45,000
事 務 用 品 費	13,000
事 業	110,000
調 査 費	50,000
講 演 会 費	40,000
座 談 会 費	20,000
会 報	496,000
会 報 費	400,000
会 報 配 布 費	96,000
予 備 費	34,000
予 備 費	34,000
合 計	979,000

(支出の部)

款 目	決 算 額	付 記
庶 務	206,726円	
総 会 費	12,884	葉書・その他
会 議 費	3,000	会場費
会 員 連 絡 費	87,492	葉書・その他
交 際 費	38,000	慶弔・その他
名 宛 印 刷 費	53,050	ラベル
事 務 用 品 費	12,300	
会 員	76,860	
会 員 名 簿 印 刷 費	76,860	
事 業	64,300	
調 査 費	19,300	歴史探訪下見
講 演 会 費	40,000	
懇 談 会 費	5,000	
会 報	466,415	
会 報 費	394,000	会報特別会計
会 報 配 布 費	72,415	普通会員分
会 計	1,066	
事 務 用 品 費	1,066	
予 備 費	100,000	
予 備 費	100,000	10万円基金積立
合 計	915,367	

山口 奥津 中島 小田 稲子 安藤 湯川 小林  
一夫 萬里子 マキ 中正二 藤江 繁美 玲子 房子  
理  
事  
相澤 杉崎 竹見 高橋 木曾 田口 府川 両毛  
栄一 正五 龍雄 佐年 正雄 鏡子 芳枝 承子  
顧 員 委 員 長 編 集 委 員 会

財 産 事業基金20万円

差引残額

976,208円 - 915,367円 = 60,841円

(総収入) (総支出) (差引残額) 次年度へ繰越

田口 石井 湯川 稲子 飯田 岡部 平岡  
鏡子 艶子 玲子 藤江 悟郎 忠夫 幸雄

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 足柄香粧株式会社  
 飛鳥屋  
 紳士服のアメリカヤ  
 画材 ガクブチ れうえ  
 伊勢治書店  
 株式会社 かまぼこ 江島  
 株式会社 小田原魚市場  
 小田原ガス  
 小田原信用金庫  
 小田原報徳自動車  
 株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 小田原中央青果株式会社  
 オリオン座  
 かまぼこ 籠 清苑  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 丸木ボウ化粧品鴨宮工場  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 正榮堂

鈴木 廣 木まほこ  
 辰寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 割烹 おる海  
 二宮  
 茶半家具株式会社  
 ちん里う本店  
 角田ガクフ子店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物齋  
 八小堂書店  
 八子マサ店  
 平井書店  
 富士写真フイルム(株)小田原工場  
 株式会社 報徳  
 松坂屋  
 丸マルク  
 学生専科  
 食器の店 マルサンストア  
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
 みみづく幼稚園  
 竹オマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 湯浅電池(株)小田原工場

特別賛助会費

平成元年度編集委員会決算報告は下記の通りです。  
 特別賛助会費(一口二万円)五十六万円は四十四法人の協賛によるもので、内訳は次の通りです。  
 三口 鐘紡(株)小田原工場  
 富士写真フイルム(株)小田原

工場	以上二社	特別賛助会費	五〇〇〇
二口 足柄香粧(株)小田原魚市場 小田原信用金庫 小田原中央青果市場(株)カネボウ化粧品(株)鴨宮工場 ヤオマサ(株)湯浅電池(株)小田原工場 以上八社	一口	預金利息	一、〇九一
(収入の部)	三十四法人	合計	五、〇〇〇
前年度より	三九	(支出の部)	
一般会計より	三、四〇〇	会報印刷費	七、六八六
		編集費	五、三三三
		取材費	四、八〇〇
		会報発送費	三、四三三
		事務用品費	一、五三五
		次年度へ	三六
合計	五、〇〇〇	各文化機関、公立・大学	五、〇〇〇

会報印刷費はNo.二三七(一四〇号)の四回分です。編集費は、写真複写、お礼、寄稿者への通信費、コピー代、編集打合せなどです。取材費はフイルム、DPE、カセットテープ、交通費などです。会報発送費は、特別賛助会員の外に寄稿者、役所、学校(小・中・高)、各文化機関、公立・大学

落穂集

図書館などへの郵送料です(近くは直接お届けしております)。お陰様を持ちまして、充実した内容の会報の発行ができ、好評を得ております。会報は、小田原の文化の一つの顔を示すものだという意気込みで編集委員一同努力いたしておりますので、よろしく今後とも御支援、お力添え、御鞭撻下さるようお願い申し上げます。

◎店長という言葉はよく使われていますが、国語辞典には載っておらず、また市民権を得ていない、と筑摩書房のPR誌に載っていました。それでは、物流はと、とりあえず二、三の国語辞典を調べましたが載っていませんでした。

◎本年一月発行の第一三九号で奥田贍子さんの「戦争中日本でも短期間のうちペニシリンが開発されていた」で、十六ページの二三行目のドイツの潜水艦により医学雑誌が届けられたのを、昭和十六年十二月としましたが昭和十八年十二月の誤り。とんでもないミスをお詫びします。日本でのペニシリン開発はそれ以後です。